

冬・石狩川の今昔

石狩川の川面を覆い尽くす厚氷、渡船に代わって氷橋と呼ばれた冬道を通学し、牛乳缶を運ぶ馬籠も川の中間まで入っていた。蘆の道しるべを頼りに、人馬物は当たり前のように往来していた。川尻からおおよそ1キロほどの上では、氷に穴を二つ開ける水下チカ漁が行われていた。漁師は川水を手杓で飲み、背からは湯気が次々とこの豊かな川にアザラシは群れなし、氷上に横たわり、魚を食み、戯れていた。半世紀前の冬の景色は、石狩川と共生するまちの姿そのものであった。▼それからおよそ数十年、漁業者は汚れた石狩川の回復を求め、上流都市、企業、工事現場へ向け抗議の叫びをあげ、被害補償、公害防止協定締結の運動を展開した。冬になつても汚濁物質を含んだ川は結氷することはなかった。そして悲しいほど無表情になつていた。岸辺の蘆にまとわりつく氷は汚染物質と雪のミルフィーユとなつていった。すでにチカ漁は忘れ去られた。▼現在、水質は国の定める環境基準値をクリアするまでに回復した。しかし、月日はむごいもので、両岸は過疎と高齢化が進み、川辺に生活感を見いだすことは難しい。国道に架けられた河口橋から見わたす厳冬の石狩川は、無幸の民の静かな慟哭の流れに見えるが、再生は不可能ではないと信じている。(市長)

広告